文化祭で展示したサクラの葉（福嶋教授の知人がいる多摩森林科学園から譲り受けた葉も）

Interview

放送大学客員教授 福嶋 司さん

プロフィール（ふくしま　つかさ）
昭和22年生まれ　東京農工大学名誉教授
植生学会会長（H20年～25年）
植生学会賞受賞（H19年）　環境庁、林野庁関係の委員会委員　東京都自然環境審議会会長代理　東村山市、清瀬市等多摩地域の市の審議会会長、委員　など多岐に渡る社会的活動。
著書　『植生管理学』『図説日本の植生』（編著・朝倉書店）『いつまでも残しておきたい日本の森』（リヨン社）等多数。

弱っている玉川上水のサクラ

放送大学はラジオ、テレビ、インターネットを通じて学習できる通信制大学・大学院で、誰でも、いつでも、どこに住んでいても学べます。全国に50ある学習センターの中の一つ、東京多摩学習センターには現在10代から80代まで3300名以上の学生が在学中。

「多まゼミ」は授業とは異なり、学生が主体的に学び、教員と、また学生同士とのつながりが生まれるよう、昨年度から開設されました。単位には換算されませんが、授業料はタダです。

福嶋教授は平成24年、東京農工大学を定年退職後、同年放送大学客員教授に就任。専門は「植生管理学」です。

5月のゼミスタート前のサクラの開花時期に、福嶋さんは下見のために3回、自転車で上水沿いに出向いたそうです。ゼミ学生11人は現地調査で、商大橋近くの小川水衛所跡にある番号登録No.1からNo.40までのサクラ44本を1本ずつ観察し、調べて歩きました。その結果、健康な木は11本（25％）しかなく、弱っている木が22本、枯れ木、切り株、切り株さえ残っていないものが11本。私たちを楽しませてくれる上水のサクラは、予想以上に弱っている木が多いという現実にぶつかります。

文化祭では調査の過程をグラフや写真で展示し、サクラの押し葉とスケッチで、オオシマザクラ、ヤマザクラ、エドヒガンなど種による違いを見せてくれました。また、実際に顕微鏡で、葉のギザギザや葉柄を観察できるコーナーがあり、丁寧な説明も受けました。

「シニア世代の学生さんが多いのですが、皆さん本当に真面目で、解らないことは熱心に質問し、学ぶ意識の高さに驚かされます。普通の大学と比べると大変な違いですね」と福嶋さん。

玉川上水のサクラが衰弱した原因として、根を踏まれ、土が固くなって根が傷んでいる。周りの高い雑木に遮られ光不足になっている。車の排気ガス等の環境問題が考えられるといいま

福嶋ゼミの学生さんが玉川上水NO.40のサクラを調査中

人と自然が
良好な関係を保ち続けるために

この秋、小平市にある放送大学東京多摩学習センターの文化祭で「玉川上水のサクラの健康診断とサクラの分類」という活動報告展示を見ました。同センターが行う「多まゼミ（センターゼミ）」の学生が玉川上水のサクラの現状を調査したもの。この指導をしたのが、同大客員教授の福嶋司さん（67歳）です。

す。その対策としては、「要らない木を伐採することですが、大切なのは『玉川上水の緑をどう維持するのか』ということ。単純に言えば、サクラ以外の樹木でもいいかもしれない。野鳥のためには大きな樹木の方がいいけれど、人にとってはサクラを優先した方がいいわけです」

話は玉川上水の開削と歴史にも及び、文献を取り出し、説明してくださいます。明快な語り口。常に笑顔で、専門用語なしで分かりやすく、楽しい授業を受けているようでした。

ブナ林を長年調査研究

大分県生まれ。兄や親戚が教師をしていたので、早くから先生になろうと決め、大分大学教育学部へ。そこで、植物生態学の有名な先生に師事し、金沢近くの白山での調査に同行したことがきっかけで、卒業後は金沢大学大学院の理学研究科へ。さらに植物学を研究するため広島大学大学院へ入り、理学博士号を取得。その後千葉大学園芸学部の助手を経て東京農工大学へ。同大学で30年にわたり教育と研究に携わり、副学長や大学教育センター長等も併任してきました。

長年、世界の自然林の代表といえるブナ林の研究に取り組んでいます。ブナの仲間は北半球の中緯度地帯に12種類が分布していて、国内はもとより、その分布地域すべてを訪れ観察調査。日本では戦後、大規模にブナ林が伐採されました。ブナ林は「緑のダム」と呼ばれ、植物や動物に生きる場を与えるとともに、私たちの生活にもさまざまな恩恵を施しています。

しかし一度伐採されると、元の姿には戻れず、ササ原になることが多い。そんな地域にブナ林を復元しようと、ブナの苗木を植える活動が近年盛んです。福嶋さん自身も群馬県沼田市の玉原高原にこれまで、約1700本の苗を植えてきました。同時に玉原湿原、日光戦場ヶ原の湿原乾燥化に対する保護と回復の方法について調査研究中。6年前にはNPO法人「玉原高原の自然を守り育てる会」を立ち上げ、月1回はフィールドワークに出かけています。

もう一つの研究テーマは樹木が持つ防火機能。スダジイ、アカガシなどの常緑広葉樹はもえにくく、昔の人は「火伏（ひぶせ）の木」と呼び、屋敷の周りに植えていたそう。樹木を用いた安全な避難緑地に関して研究を進めています。

「いい商売を選びました」

「多摩地域は森の面積が減っていっています。注意すべきは残った森の質が悪くなっていること。手を入れなければ、大きな木ばかりになってヤブになってしまいます。すべての雑木林が昔のままである必要はなく、本数を少なくして、公園のようにしてもいいし、下刈りや伐採を頻繁にやって、昔通りのスタイルにするのもいい。大切なことはどのように雑木林を管理していくかを考えることです」

そのためにはやはり行政の力が大きい。雑木林の所有者と同じテーブルにつき、議論することが必要。どこに緑があるか、財産目録をきちんとし、行政は市民に方向性を示すことが肝要という。話を聞いていくうちに「植生管理学」がどういうものか少し分かってくるようです。

「植物は漫然と見てはダメ。葉の形などポイントを絞って、たくさん観察して比較すれば、種類もわかってきます。この仕事は愚鈍でもいいので、歩くことを厭わなければできる仕事。まぁ体力勝負？ですね。いい商売を選んだと思いますよ」と笑みがこぼれます。

東京多摩学習センターの後期面接授業（スクーリング）は「都市域の自然誌」。福嶋先生の授業は人気があるので、受講者が抽選になるほどです。「放送大学は一人で勉強するのが基本ですが、学生同士のつながりが広がるよう、サポートしていきたい」

現在「東京の森を歩く」出版に向けて準備中。また、40年以上のブナ林研究の集大成として、若い世代へ引き継ぐ教科書的な本を出したいと願っています。